

次の文章を読んで、(1)その内容を200語程度の英語で要約し、[(2)その内容についてのあなたの意見を200語程度の英語で書きなさい。] (2008年 東京外語・前期)

世界中の国々の言語で蓄えられた文化は、英語にはそのうちの微々たるものしか翻訳されていません。だから、英語を知ったからといって、それぞれの文化にアクセスできるわけではないのです。英語を知ったからといって、世界を知ることができるはずがないんです。英語によって知ることができるのは、英語にされているものだけですから。

昔、オランダ語のみを通してでは世界を知ることができなかつたように、ほんとうは英語だけを通して世界を知ることなどできないし、ある意味で、こういう形で英語を絶対化することは英語に対して失礼です。というのは、日本人が英語一辺倒になって、英語を重要視する最大の理由は、別に英語で蓄えられた文化に対して惹かれていくというよりも、その経済力とか軍事力に頼って生きていこうとしているからであって、ある意味では非常に打算的で下品なわけです。

ほんとうの国際化というのは、世界にあるさまざまな文化と、英語経由、オランダ語経由、中国語経由ではなくて、国と国同士が直接の関係を築くことなのです。国際というのは国と国とのあいだという意味ですから、これは言葉だけではなく、外交においても、文化交流においても、どこかの国、どこかの言葉を経由して---何カ国語かを経由していくと、隔靴搔痒の感があります。そうではなくて、直接の関係を築いていくことがほんとうの国際化になる、国際交流になるし、理解にもつながるわけです。

これは大変なことなんです。大変な努力が必要ですし、時間もかかることですが、たった一つの言語を通してそれができると錯覚していることが、日本の国際化という病気の非常に大きな特徴だと思います。

これがいちばんよく表れているのがサミット、主要国首脳会議です。七カ国だったのが、今、ロシアも加わって八カ国になっています。このサミットの通訳のあり方に、この日本の特徴がいちばんよく表れています。これは国ごとに順ぐりに開かれて、もう二十八年以上たっています。日本でも七年に一度、開催されていて、二〇〇〇年に沖縄サミットが開かれました。その七年前に東京サミットがありました。

このサミットで行われる同時通訳の図式というのがあります。サミットは先ほど言った八カ国が参加します。そして言語は六つの言語を使います。これをいちいち逐次通訳をやっていたら六倍時間がかかりますから、同時通訳を使います。

このサミットの同時通訳は第一回開催以来ずっと二十八年間、この方式です。日本語を使うのは日本、英語を使うのはアメリカ、イギリス、カナダ、フランス語はフランスとカナダ---カナダはフランス語圏がありますから---それからドイツ語はドイツ、イタリア語はイタリア、ロシア語はロシアがそれぞれ使う言語です。

フランスのシラク大統領が発言すると、それは即座に直接、英語、ロシア語、イタリア語、ドイツ語に翻訳されます。ところが、日本語に通訳するには、いったん英語に訳されこの英語から日本語に訳されます。沖縄サミットのときは森さんが首相でした。森さんが日本語で発言すると、これが直接通訳されるのは英語だけ。フランス語にも、ドイツ語にも、イタリア語にも、ロシア語にも、英語を経由して訳されていく、つまり、リレーになってしまうわけです。

どうですか。この図式を見ると、日本語はなにか鎖国時代の長崎の出島みたいな感じがしませんか。それぞれの国は、これだけ緻密な、緊密な関係を築いています。日本は常に英語を経由して築くということになります。

言葉というのは、単に意思を伝えたり、自分の感情や考えを伝える手段であるだけでなく、自分の感情や考えを整理したり、組み立てたりする、つまり、物事を考えるための手段でもあるのです。言葉はそれぞれその言葉を持って生きてきた民族の歴史や、文化地理、自然、それによって培われた世界観などを映して内包しているものですから、常にこういうふうに英語を経由して伝えられるということは、いつも日本語が英語のフィルターのかかった形でほかの言語に伝えられるということになります。さらには微妙なニュアンスはすべて捨象されてしまいます。

こうして、すべてのサミット参加国が直接コミュニケーションしていたのに対して、日本だけが二十八年ものあいだ、ずっと英語経由になっていたのです。英語経由のフ

フィルターをかけて交流してきたということ、それをなんとも思わなかった。これはかなり異常な事態なんですけれども、この異常事態を異常と思わなかったということこそが、異常だと私は思います。これは国際化というものを錯覚している、つまり、英語、世界最強の国の言語を通せば、世界を知ることができる、世界に発信することができる、世界から情報が取り入れられると錯覚しているところで成り立っているんです。

米原万里『米原万里の「愛の法則」』

(1) 【解答例】東京外国語大学がホームページで公開している解答例です。

The true sense of becoming international is for each nation to establish direct relationships with various cultures of the world and not trying to access other cultures only through English, Dutch nor Chinese. Inter-national means between, or inter nations. We naturally feel frustrated if we have to go through a certain nation or a certain language, in order to access other nations, in not just languages but in diplomacy or inter cultural exchange. I think in order to become truly international and to have international exchange and understanding we need to establish direct relationships.

All the Summit participant countries had been in direct communication with one another but only Japan has communicated only through English in the past twenty eight years. But we didn't think much about the fact that we operated through this English filter for so long. I think it is extraordinary in the sense we Japanese did not take this extraordinary situation to be extraordinary. This stems from the fact that we have misunderstood the meaning of 'internationalization'; that is to say, if we know English, the language of the dominant country in the world, we can know the world, we can communicate to the world and we can obtain information on all of the world. (209 words)

【解説】大学が自ら正解例を公表するのは本来、当然のこのように思われるが、実際にはきわめて稀なことである。あえて80点程度の解答例を提示する理由はないので、このくらい書いていけば満点をもらえると考えて、自分の解答を組み立てていけばよい。貴重な参考資料である。他大学もぜひ見倣ってほしいが、現状ではあまり多くは望めない。東京外国語大学が名実ともに一流大学の証であろう。

- ・日本語の原文のどの箇所が拾われて英語に訳されているかをチェックしてみよう。全部で11段落、一行40字詰めに換算すると、55行になる。改行による余白を除くとおおそ正味2000字の文章である。これを200語程度の英文に要約するわけだが、まず日本語で要約して、それを英訳する時間的余裕はまずない。しかし日本語の文章からダイレクトに英語の要約文を組み立てていくのは並大抵のことではない。いくら英語が重視されるとはいえ、東京外語の受験生は英語専攻志望者ばかりではない。
- ・段落の番号を付けた日本語文と要約の英語文を見比べると、2つの段落のほぼ全訳に相当することがわかる。11の段落から、筆者の主張の柱となる段落を2つ選び、ほぼ和文英訳に近い形でまとめたわけである。段落の選択を間違えなければ、あとは和文英訳型の英作文の力で決まる。もちろん、前後が繋がりさえすれば、指定の語数に大きく反しない限り、どうしても英語に訳し難い部分を省くことも、また筆者の意図を汲んだ言い換えも可能である。ただし、これを和文英訳の問題と考えた場合、量的には京都大学を上回る。周到に訓練しておかないと高得点は望めないが、内容的には、まるで歯が立たないという感じはないはずだ。
- ・拾う段落の候補としては、第三段落と結論に相当する最後の段落以外に、主題を提示している第一段落と筆者の主張の論拠となる第十段落が考えられるが、これをうまく採り入れてまとめる力があれば別だが、出題者はそこまで求めているわけではない。

- ①世界中の国々の言語で蓄えられた文化は、英語にはそのうちの微々たるものしか翻訳されていません。だから、英語を知ったからといって、それぞれの文化にアクセスできるわけではないのです。英語を知ったからといって、世界を知ることができるはずがないんです。英語によって知ることができるのは、英語にされているものだけです。
- ②昔、オランダ語のみを通してでは世界を知ることができなかつたように、ほんとうは英語だけを通して世界を知ることなどできないし、ある意味で、こういう形で英語を絶対化することは英語に対して失礼です。というのは、日本人が英語一辺倒になって、英語を重要視する最大の理由は、別に英語で蓄えられた文化に対して惹かれていくというよりも、その経済力とか軍事力に頼って生きていこうとしているからであって、ある意味では非常に打算的で下品なわけです。
- ③ほんとうの国際化というのは、世界にあるさまざまな文化と、英語経由、オランダ語経由、中国語経由ではなくて、国と国同士が直接の関係を築くことなのです。国際というのは国と国とのあいだという意味ですから、これは言葉だけではなく、外交においても、文化交流においても、どこかの国、どこかの言葉を經由して----何カ国語かを經由していくと、隔靴搔痒の感があります。そうではなくて、直接の関係を築いていくことがほんとうの国際化になる、国際交流になるし、理解にもつながるわけです。
- ④これは大変なことなんです。大変な努力が必要ですし、時間もかかることですが、たった一つの言語を通してそれができると錯覚していることが、日本の国際化という病気の非常に大きな特徴だと思います。
- ⑤これがいちばんよく表れているのがサミット、主要国首脳会議です。七カ国だったのが、今、ロシアも加わって八カ国になっています。このサミットの通訳のあり方に、この日本の特徴がいちばんよく表れています。これは国ごとに順ぐりに開かれて、もう二十八年以上たっています。日本でも七年に一度、開催されていて、二〇〇〇年に沖縄サミットが開かれました。その七年前に東京サミットがありました。
- ⑥このサミットで行われる同時通訳の図式というのがあります。サミットは先ほど言った八カ国が参加します。そして言語は六つの言語を使います。これをいちいち逐次通訳をやっていたら六倍時間がかかりますから、同時通訳を使います。
- ⑦このサミットの同時通訳は第一回開催以来ずっと二十八年間、この方式です。日本語を使うのは日本、英語を使うのはアメリカ、イギリス、カナダ、フランス語はフランスとカナダ----カナダはフランス語圏がありますから----それからドイツ語はドイツ、イタリア語はイタリア、ロシア語はロシアがそれぞれ使う言語です。
- ⑧フランスのシラク大統領が発言すると、それは即座に直接、英語、ロシア語、イタリア語、ドイツ語に翻訳されます。ところが、日本語に通訳するには、いったん英語に訳されこの英語から日本語に訳されます。沖縄サミットのときは森さんが首相でした。森さんが日本語で発言すると、これが直接通訳されるのは英語だけ。フランス語にも、ドイツ語にも、イタリア語にも、ロシア語にも、英語を經由して訳されていく、つまり、リレーになってしまうわけです。
- ⑨どうですか。この図式を見ると、日本語はなにか鎖国時代の長崎の出島みたいな感じがしませんか。それぞれの国は、これだけ緻密な、緊密な関係を築いています。日本は常に英語を經由して築くということになります。
- ⑩言葉というのは、単に意思を伝えたり、自分の感情や考えを伝える手段であるだけでなく、自分の感情や考えを整理したり、組み立てたりする、つまり、物事を考えるための手段でもあるのです。言葉はそれぞれその言葉を持って生きてきた民族の歴史や、文化地理、自然、それによって培われた世界観などを映して内包しているものですから、常にこういうふうに英語を經由して伝えられるということは、いつも日本語が英語のフィルターのかかった形でほかの言語に伝えられるということになります。さらには微妙なニュアンスはすべて捨象されてしまいます。
- ⑪こうして、すべてのサミット参加国が直接コミュニケーションしていたのに対して、日本だけが二十八年ものあいだ、ずっと英語経由になっていたのです。英語経由のフィルターをかけて交流してきたということ、それをなんとも思わなかった。これはかなり異常な事態なんですけれども、この異常事態を異常と思わなかったということこそが、異常だと私は思います。これは国際化というものを錯覚している、つまり、英語、世界最強の国の言語を通せば、世界を知ることができる、世界に発信することができる、世界から情報が取り入れられると錯覚しているところで成り立っているんです。

The true sense of becoming international is for each nation to establish direct relationships with various cultures of the world and not trying to access other cultures only through English, Dutch nor Chinese. Inter-national means between, or inter nations. We naturally feel frustrated if we have to go through a certain nation or a certain language, in order to access other nations, in not just languages but in diplomacy or inter cultural exchange. I think in order to become truly international and to have international exchange and understanding we need to establish direct relationships.

All the Summit participant countries had been in direct communication with one another but only Japan has communicated only through English in the past twenty eight years. But we didn't think much about the fact that we operated through this English filter for so long. I think it is extraordinary in the sense we Japanese did not take this extraordinary situation to be extraordinary. This stems from the fact that we have misunderstood the meaning of 'internationalization'; that is to say, if we know English, the language of the dominant country in the world, we can know the world, we can communicate to the world and we can obtain information on all of the world. (209 words)

解答例の英文が読めない人はいないと思うが、少し補足しておく。

- ・第一段落 only through English, Dutch nor Chinese. の nor は not trying to access ... の not に呼応して用いられているが、通常は or で代用される。そのまま訳し難い「隔靴搔痒の感があります」は、和文和訳すれば「もどかしい」くらいの意味だが、We naturally feel frustrated はなかなか出てこないだろう。
- ・第二段落 I think it is extraordinary in the sense we Japanese did not take this extraordinary situation to be extraordinary. は in the sense (that) we Japanese did not ... つまり同格の接続詞 that の省略であるが、もちろん省略しなくてもよい。一般的には(他大学を受験する場合には)省かないほうが無難であろう。  
「世界に発信することができる」we can communicate to the world は普通は思いつかない。communicate something to ~ のほうが普通だろう。「錯覚している」have misunderstood the meaning of ... は「錯覚」を「誤解」と言い換えたもの。This stems from the fact that ..., (stem=arise) は身につけておきたい表現。

別解答例を提示する前に、もう一度日本語の文章の要旨を簡単にまとめてみよう。

英語で知ることができるのは世界の文化のごく一部に過ぎないが、日本は多国家間、異文化間のコミュニケーションを、それぞれの言語対日本語という直接の関係ではなく、英語というフィルターを通して間接的に行なってきた。その顕著な例がサミットであるが、微妙なニュアンスはすべて捨象されてしまう。経済的・軍事的に世界最強の国の言語を通せば世界を理解できる、国際化を実現できるというのは完全な思い違いに過ぎない。(196字)

200字程度の日本語に要約しなさいと言う問題であれば申し分ないだろうが、これを英訳してもおそらく100語に満たないだろう。したがって大学の解答例のようにある箇所をまとめて訳したほうがはるかに効率が良いことになる。しかし設問が80-100語程度の英語で(or 100語以内の英語で)要約せよというのであれば話は別である。なお日本語の字数と英語の語数の関係は文体によってかなり違ってくるので、実際に訳しみて体得するのが一番である。引き延ばす、あるいは圧縮する基本的なテクニックはいくらかもある---副詞節か分詞構文か/関係詞節か不定詞・分詞の形容詞用法か/接続語の使い分け(moreover か in addition to this か/...; on the other hand か ..., whileか)等々。

【阿佐谷英語塾・解答例】

Knowing English alone does not mean knowing all of the world, all cultures of the world. To become really international is for various nations to establish direct relationships with each other through their respective languages, not just through English, Dutch or Chinese. This is true in the case of cross-cultural exchange as well as in the case of diplomacy. To build up direct relationships with each other not depending on a particular nation or a particular language results in genuine international exchange, international understanding, and so desired internationalization. 89

Language is a primary means of thought, reflecting the world view of each nation formed through the history of each culture. Therefore, all the Summit participant countries have communicated directly with each other. Japan alone has communicated only through the filter of English these twenty-eight long years. This is very unusual, but what is indeed unusual is that we Japanese have taken for granted this situation for so long a time. We have had a misconception that by way of English, we can send or receive all necessary information in the modern world. That is to say, we have assumed that using the language of the most powerful country in the world, economically and militarily, we can become really international. 121 (210 words)

数え間違いでなければ、210語である。4つの段落の内容を拾っているが、決して受験生の参考にならないレベルの英語ではないはずだ。

第一段落の in the case of や 第二段落の That is to say は字数を稼ぐためでもある。段落ごとの語数の書き込みは消すことを忘れずに。

※数年前に解答例を掲載したが、見直すと(2015.12.28)一カ所文法・語法上誤りがあったので訂正した結果、第二段落の最後の数行を変更した。misunderstand という動詞をthat節を目的語として用いるという誤りである。慎んで訂正します。

次の文章を読んで、(1)その内容を150語程度の英語で要約し、(2)その内容についてのあなたの意見を200語程度の英語で書きなさい。(2009年 東京外語・前期)

大学生の我が子に、過剰に干渉する親が目立っている。授業の選択から卒業式の服装まで心配する。まるで上空から子供を見守り続けるヘリコプターのような？

関東地方の私立大学、今春の入学式の直後、事務室の電話が鳴った。中年女性の声で、「第2外国語は何を選択したらいいでしょうか」。職員が「ご本人は何を勉強したいのですか」と聞くと、受話器の向こうで「〇〇ちゃん、あなたはどうなの」と尋ねる声、「本人がいるなら電話に出てこい、と言いたいところなんです」と職員は嘆く。

親からは様々な意見や質問が電話や手紙で寄せられる。「調理実習室のガスコンロは服に火がつきそうで危ない。IH（電磁誘導加熱）にしてほしい」「『きょうは二日酔いだ』と言いながら講義した講師がいたそうだが、何事だ」「卒業式には着物で出席させたいが、学生の何割が着物なのか知っておきたい」。

最近の流行語に「モンスターペアレント」がある。これは、理不尽な要求を一方的に学校側に突きつける親のこと。これに対し、授業のことまで尋ねてくるような過保護、過干渉の親のことを、教育関係者は「ヘリコプターペアレント」と呼ぶ。元々は米国で使われていた言葉だという。まるでヘリコプターで上空を旋回するように常に子供を見守り、何かあると急降下して援助に向かうからだ。

昔から過保護な親はいたが、最近の過保護の特徴は少々違うらしい。小野田正利・大阪大教授（教育制度学）は、大学にまで電話する親たちが増えていることについて、「消費者としての権利意識が強まっていることが背景にある」と指摘する。高い学費を払うのだから、その分のサービスはしてほしいということだろう。また自分も大卒という親が増え、大学に関心が高いことも大きい。

各大学が夏休みシーズンなどに開くオープンキャンパス（大学見学会）には、受験生と一緒に親も多く参加してくる。少子化で厳しい学生獲得競争にさらされている昨今、こうした熱心な親たちこそ大事にしようという大学も増えてきた。

\*『読売新聞』2008年9月13日

**【解説】**与えられた文章（課題文）の内容が2008年と一変したのは当然であり、テーマの山を張るような対策は外れれば惨めである、というより、ふつうは当たらない。したがって、出来るだけ多くの過去問に取り組んで、相当な英作文の力をつけておくほかはないが、要約の仕方によって、超難問にもなれば、対処できる範囲内の問題にもなる。こうした新聞のコラム記事的な日本語をまともに和文英訳しようとすると、絶対的に語彙が不足する。その点では論説文型の2009年よりもむしろ手強いが、基本的に具体例を省きながら原文の「趣旨」をまとめていく要約本来の手法を用いれば、対処できない問題ではない。

日本語の課題文の字数は前年度の半分以下、要約の語数も200語から150語に減少している。字数よりも特に課題文の内容次第でかなり異なる解答法が必要になるが、それを体得する方法は、言うまでもなく過去問を解くことである。東京外語の場合、そもそも問題全体の構成や配点自体が固定していないので、臨機応変に対処する柔軟性を求められるから、なおさらである。

具体的な要約の方法だが、日本語の文章の内容と語数からして、全体を自分なりに再構成する方法もあるが、時間的制約がある以上、課題文の内容の展開に沿ってまとめていくことを基本としたほうが効率がよい。（ただし日本語と英語の作文力のある人はそれに固執する必要はない。）

具体的に拾う箇所の例を次ページにまとめてみよう。

①大学生の我が子に、過剰に干渉する親が目立っている。授業の選択から卒業式の服装まで心配する。まるで上空から子供を見守り続けるヘリコプターのように？

②関東地方の私立大学、今春の入学式の直後、事務室の電話が鳴った。中年女性の声で、「第2外国語は何を選択したらいいでしょうか」。職員が「ご本人は何を勉強したいのですか」と聞くと、受話器の向こうで「〇〇ちゃん、あなたはどうか」と尋ねる声、「本人がいるなら電話に出てこい、と言いたいところなんです」と職員は嘆く。

③親からは様々な意見や質問が電話や手紙で寄せられる。「調理実習室のガスコンロは服に火がつきそうで危ない。IH（電磁誘導加熱）にしてほしい」「『きょうは二日酔いだ』と言いながら講義した講師がいたそうだが、何事だ」「卒業式には着物で出席させたいが、学生の何割が着物なのか知っておきたい」。

④最近の流行語に「モンスターペアレント」がある。これは、理不尽な要求を一方的に学校側に突きつける親のこと。これに対し、授業のことまで尋ねてくるような過保護、過干渉の親のことを、教育関係者は「ヘリコプターペアレント」と呼ぶ。元々は米国で使われていた言葉だという。まるでヘリコプターで上空を旋回するように常に子供を見守り、何かあると急降下して援助に向かうからだ。

④昔から過保護な親はいたが、最近の過保護の特徴は少々違うらしい。小野田正利・大阪大教授（教育制度学）は、大学にまで電話する親たちが増えていることについて、「消費者としての権利意識が強まっていることが背景にある」と指摘する。高い学費を払うのだから、その分のサービスはしてほしいということだろう。また自分も大卒という親が増え、大学に関心が高いことも大きい。

⑤各大学が夏休みシーズンなどに開くオープンキャンパス（大学見学会）には、受験生と一緒に親も多く参加してくる。少子化で厳しい学生獲得競争にさらされている昨今、こうした熱心な親たちこそ大事にしようという大学も増えてきた。

- ・直ぐに気がつくことは、一段落のヘリコプターと四段落のヘリコプターペアレントが重複していることである。ここはある程度まとめたほうがよいだろう。
- ・二段落の具体例はそっくり省いたが、もちろんここを拾ってもよい。
- ・便宜上、課題文に沿って段落を設けて語数を記入していくが、内容的には①-③と④-⑤の2段落構成にしてもよいだろう。

#### 【阿佐谷英語塾・解答例】

Nowadays more and more Japanese parents are excessively interfering with [meddling with/controlling] (affairs of) their children who are already university students. They are called "helicopter parents." (21-24 words)

They call, or write to, the universities to express various opinions or ask various questions, for example, whether their children should wear kimono at the graduation (ceremony). (26-27 words)

Unlike "monster parents" making unreasonable requests [claims/demands], "helicopter parents" are so protective (and interfering [controlling]) that they even ask about the classes [courses] their children should take. They are watching their children carefully, and should anything happen, they will come down at full speed to help them. (42-44 words)

Very protective parents today are more conscious of their rights as consumers. They have great interest in whether the services the universities offer are (really) worth the high tuition [fees] they pay. (30-31 words)

On the other hand, universities that welcome [accept] these parents are increasing in number, for most universities have more difficulty attracting students because of the declining birthrate [as the number of children decreases]. (26-27 words)

(145-153 words)

\*語彙の不足する人は、「過剰に」excessively の代わりに too much を用いる、「過剰に干渉する」を pay too much attention to で表す / 「高い学費＝高い授業料」high tuition fees を much money で代用する、といった言い換えでカバーするテクニックを身に付けたい。これだけの要約＝英作文を難なくこなせる受験生はまずいないだろう。英語に関しては、東京外語が超難関大学であることは間違いない。

※順序が逆になってしまったが、次に大学が公開している解答例を見てみよう。

大学生の我が子に、過剰に干渉する親が目立っている。授業の選択から卒業式の服装まで心配する。まるで上空から子供を見守り続けるヘリコプターのように？

関東地方の私立大学、今春の入学式の直後、事務室の電話が鳴った。中年女性の声で、「第2外国語は何を選択したらいいでしょうか」。職員が「ご本人は何を勉強したいのですか」と聞くと、受話器の向こうで「〇〇ちゃん、あなたはどうかの」と尋ねる声、「本人がいるなら電話に出てこい、と言いたいところなんです」と職員は嘆く。

親からは様々な意見や質問が電話や手紙で寄せられる。「調理実習室のガスコンロは服に火がつきそうで危ない。IH（電磁誘導加熱）にしてほしい」「『きょうは二日酔いだ』と言いながら講義した講師がいたそうだが、何事だ」「卒業式には着物で出席させたいが、学生の何割が着物なのか知っておきたい」。

最近の流行語に「モンスターペアレント」がある。これは、理不尽な要求を一方的に学校側に突きつける親のこと。これに対し、授業のことまで尋ねてくるような過保護、過干渉の親のことを、教育関係者は「ヘリコプターペアレント」と呼ぶ。元々は米国で使われていた言葉だという。まるでヘリコプターで上空を旋回するように常に子供を見守り、何かあると急降下して援助に向かうからだ。

昔から過保護な親はいたが、最近の過保護の特徴は少々違うらしい。小野田正利・大阪大教授（教育制度学）は、大学にまで電話する親たちが増えていることについて、「消費者としての権利意識が強まっていることが背景にある」と指摘する。高い学費を払うのだから、その分のサービスはしてほしいということだろう。また自分も大卒という親が増え、大学に関心が高いことも大きい。

各大学が夏休みシーズンなどに開くオープンキャンパス（大学見学会）には、受験生と一緒に親も多く参加してくる。少子化で厳しい学生獲得競争にさらされている昨今、こうした熱心な親たちこそ大事にしようという大学も増えてきた。

\* 『読売新聞』2008年9月13日

#### (1)まとめ [東京外語 解答例]

In Japan, more and more parents of university students are interfering with their children, from matters concerning the child's classes at university to what he or she should wear at the up coming graduation ceremony.

They are called "helicopter parents" because they are like helicopters that circle over their children and come down to help when necessary. This expression was originally coined in America.

According to a professor at Osaka University, such parents think that because they are paying their children's tuition fees, they have the right, as consumers, to know what kind of service their child is receiving at the university.

Consequently, more and more universities are beginning to look to these parents in order to attract as many students as possible, when the number of children is decreasing in Japan and student recruitment is becoming more and more difficult.

(140 words)

※解答には何通りものヴァリエーションがあることがわかるだろう。

あるインターネットの掲示板で、子どもだけの外出をどこまで許すか、という問いかけに、様々な意見が交わされた。次の文章を読んで、(1)その内容を200語程度の英語で要約し、(2)その内容についてのあなたの意見を200語程度の英語で書きなさい。

(2010年 東京外語・前期)

中2男子の母親は、「友達とレストランで夕飯食べてきていい？」と息子に聞かれて驚いた。「私が中学のときは、そんなこと考えたこともなかったし、友達の母親たちが、それを許しているのも信じられない。私の考えが古いのか。皆さんだったらOKしますか？」と問いかけた。

これに対し、「中高生は家で食事をするのが基本」とする意見が多かった。しかし30歳代前半の男性2人からは、「部活の帰りによく友達とファミレスやラーメン屋で夕飯を食べて帰った。都市部かそれ以外か、公立か私立か、部活の有無にもよるのでは？」「体育祭や学校祭の後に焼き肉店で打ち上げをしていた。なぜ中高生の外食がだめなのか、理由が分からない」という声も。

かつてと違い、子どもが気軽に入れる形態の飲食店が増えたせい、「たこ焼きやハンバーガーくらいならいいが、ファミレスは高校生から」「休日の昼食はいいが、夕食はだめ」など、どこで線引きをするのか、各家庭で苦心している様子もうかがえる。

もう一つ、横浜市在住の女子中学生の母親からは「子どもだけで東京ディズニーランド(TDL)に行くのはOK？」の投稿が。TDLに近い千葉や東京などでは最近、小学校の卒業記念に子どもだけで行くのが人気のようで、「繁華街に行くよりよほど安全」など肯定的な意見が目立った。ただし、「携帯があるからと楽観せず、緊急時の連絡先などを事前によく話し合う」「帰宅時間やおこづかいなどは親同士で相談して足並みをそろえる」などのアドバイスが寄せられた。

子どもだけの外食や外出について、教育評論家の親野智可等(おやのちから)さんは、「年齢や性格、地域事情などによって状況は変わるので、各家庭で判断するしかないが、子どもが納得しなければ、親に隠れて行くようになる」と指摘。外出先でどのような危険が発生しうるかを、親子でノートに書き出すことを勧める。

例えば、夜に外食すれば、帰り道に一人になることも考えられ、犯罪の標的にされやすい。書き出した危険について、どうすれば回避できるか考え、外出先や時間を変更したり、外出自体を断念したりすることも含め、よく話し合う。「おこづかいを何にどれだけ使ったかも、後できちんと報告させるべきでしょう。」

一方、食育の観点から問題を指摘するのは、食育コーディネーターの大村直己さん。中学生のブログには、食べ放題の焼き肉店で「頼みすぎて黒こげの肉がたくさん残った」「ジュースに肉を入れ、じゃんけんで負けたらそれを飲んだ」などの記述があるという。「子どもだけの外食を許す前に、食の知恵やマナーをしっかりと教えるべきだ」と話す。

※日本語の課題文の字数が2009年度より少し増え、要約する英語の語数も150語程度から200語程度に増えているが、課題文の字数と要約文の語数指定に特別な相関関係はないだろう。内容自体は昨年度よりもさらに平易になったが、求められるのは要約の力よりも和文英訳型の英作文の力であることに変わりはない。したがって、解答作成の方法も昨年度の解説で書いたことと基本的に変わらない。

※まず次ページで、大学がホームページで公開している解答例と課題文との対応関係を見ていこう。

(1) Summary [東京外語 解答例]

A mother of a junior-high-school boy was shocked when her son asked her for permission to eat out with friends at a restaurant, because when she was his age, she never did such a thing, and she couldn't believe that other mothers were allowing their children to eat out. So she asked for the opinions of others, and the majority of the comments was that high school students should eat at home: However, there were some who said there's nothing wrong with children eating out unaccompanied by adults.

Another mother, whose daughter was in junior high, asked if parents thought it OK for their children to go to Tokyo Disneyland (TDL) with friends. It is becoming popular among primary school kids to go to TDL in groups unaccompanied by adults. Some said that it is much safer than certain areas in the city, and many people had positive views on this matter.

An educational critic commented that kids will go out anyway, and he recommended that the parents and children get together and discuss the matter thoroughly beforehand. Another specialist pointed out that parents should teach their children about nutrition and table manners before they allow them to eat out on their own. (203 words)

中2男子の母親は、「友達とレストランで夕飯食べてきていい?」と息子に聞かれて驚いた。「私が中学のときは、そんなこと考えたこともなかったし、友達の母親たちが、それを許しているのも信じられない。私の考えが古いのか。皆さんだったらOKしますか?」と問いかけた。

これに対し、「中高生は家で食事をするのが基本」とする意見が多かった。しかし30歳代前半の男性2人からは、「部活の帰りによく友達とファミレスやラーメン屋で夕飯を食べて帰った。都市部かそれ以外か、公立か私立か、部活の有無にもよるのでは?」「体育祭や学校祭の後に焼き肉店で打ち上げをしていた。なぜ中高生の外食がだめなのか、理由が分からない」という声も。

かつてと違い、子どもが気軽に入れる形態の飲食店が増えたせいか、「たこ焼きやハンバーガーくらいならいいが、ファミレスは高校生から」「休日の昼食はいいが、夕食はだめ」など、どこで線引きをするのか、各家庭で苦心している様子もうかがえる。

もう一つ、横浜市在住の女子中学生の母親からは「子どもだけで東京ディズニーランド(TDL)に行くのはOK?」の投稿が。TDLに近い千葉や東京などでは最近、小学校の卒業記念に子どもだけで行くのが人気のようで、「繁華街に行くよりよほど安全」など肯定的な意見が目立った。ただし、「携帯があるからと楽観せず、緊急時の連絡先などを事前によく話し合う」「帰宅時間やおこづかいなどは親同士で相談して足並みをそろえる」などのアドバイスが寄せられた。

子どもだけの外食や外出について、教育評論家の親野智可等(おやのちから)さんは、「年齢や性格、地域事情などによって状況は変わるので、各家庭で判断するしかないが、子どもが納得しなければ、親に隠れて行くようになる」と指摘。外出先でどのような危険が発生しうるかを、親子でノートに書き出すことを勧める。

例えば、夜に外食すれば、帰り道に一人になることも考えられ、犯罪の標的にされやすい。書き出した危険について、どうすれば回避できるか考え、外出先や時間を変更したり、外出自体を断念したりすることも含め、よく話し合う。「おこづかいを何にどれだけ使ったかも、後できちんと報告させるべきでしょう。」

一方、食育の観点から問題を指摘するのは、食育コーディネーターの大村直己さん。中学生のブログには、食べ放題の焼き肉店で「頼みすぎて黒こげの肉がたくさん残った」「ジュースに肉を入れ、じゃんけんで負けたらそれを飲んだ」などの記述があるという。「子どもだけの外食を許す前に、食の知恵やマナーをしっかりと教えるべきだ」と話す。

※テーマは小中高生の外食と外出に対する親の対処である。解答例は、課題文の展開に沿って、下線を引いた箇所に適宜和文和訳を施して英訳したものであり、TDL以外の具体例はほぼ全面的に省いた文字通りの summary である。英語に直しにくい細部には初めから触れず、必要な箇所は言い換え(和文和訳)で切り抜ける、受験生にとって大いにヒントとなる解答例である。

【解説】設問の文章には「子どもだけの外出をどこまで許すか」という記述はあるが、「子どもだけの外食」という表現は特にない。しかし、課題文を読むと、第一段落から第三段落は、明らかに、単なる外出ではなく外食がテーマである。反対に（ある程度の外食を伴うにしても）外出を話題にしているのが第四段落である。そしてこの両者を「子どもだけの外食や外出について」という書き出しで始まる第五段落以下でまとめている。

したがって、英語で要約するとき、第一段落～第三段落を一つのパラグラフにまとめ、第四段落を二つ目のパラグラフとして独立させ、残りの第五段落～第七段落を結びのパラグラフとしてまとめるという、大学の解答例の3パラグラフ構成は、まさに模範解答である。これ以外のパラグラフ構成が減点の対象になるということではないが、課題文を読んでこのパラグラフィングが頭に浮かぶと200語程度の要約はそれほど負担にならないだろう。設問(2)の自分の意見を述べる自由英作文よりも、(1)の要約を苦手とする人も、①課題文のどこを拾うか、②英語に訳しにくい表現を適宜省きながらどう言い換えていくか、の二点がポイントであることを忘れなければ、基本的な日本語の読解力と基本的な英作文の力で対処できるはずである。なお、要約の場合には、多めに書けばそれだけ評価されるとは考えにくいので、指定の語数を大幅に越えるのは望ましくない。

ただし、次に示す別解答例は、拾う箇所を絞りつつ、平易な表現を基本にして語数を稼ぐ書き方の例である。

#### 【阿佐谷英語塾・解答例】

A mother of a junior-high-school boy was surprised to hear him ask her if he could eat out at a restaurant with friends, because she never thought of such a thing when she was a junior-high-school student. So she asked other parents if they would allow [permit] their children to do so. Most of the opinions were that high school students should eat at home. But there were a few opinions that there is no reason they should not [cannot] eat out by themselves. (82-83 words)

For another example [On the other hand], a mother of a junior-high-school girl asked other parents if it was OK for their children to go to Tokyo Disneyland not with adults but only with friends. It seems popular among (primary school) children to go to TDL by themselves, and on [about] this (matter/subject) there were more positive views [opinions] than negative ones: one of the reasons is that TDL is much safer than city centres. (66-70 words)

An educational critic [A critic] says that if parents tell their children not to do so without persuading them [explaining the reasons], they will go out or eat out without telling them about that. So he advises parents to discuss this (matter/subject) well with their children. Another specialist points out that parents should develop a desirable [good] eating habit properly in their children beforehand. (57-58 words)  
(205-211 words)

- \* 第一段落で A mother of a junior-high-school student としておけば、第二段落の書き出しを Another mother of a junior-high-school student とすることもでき、「もう一つ」にこだわらなくても済むはずであるが、冠詞と of の解釈にこだわると迷路にはまり込むので、あえて深入りはしない。
- \* 第二段落 elementary school ではなく primary school を用いるのはイギリス英語だとされているので「卒業記念に」を just after graduation と意識するのは避けた。英国では graduation は大学の卒業にしか用いないとされているからである。同様に、city centre もイギリス英語である。
- \* 第二段落と第三段落で matter を括弧に入れたのは、この単語が浮かばなかったときのためである。
- \* 現在中学・高校の教科書で習っているのはアメリカ英語だが、私たち普通の日本人にイギリス英語とアメリカ英語の厳密な使い分けなどできるはずもない。受験生はあまりナーバスにならないほうがよいだろう。